

モンドに火の手が
上がってから
数時間…

「やっぱり
この岩場を通ると
思ってたぜ」

「まあヒルチヤール達の
包囲網を
抜けるにはここを
抜けるしか
ないからなあ」

「くう…っ」

「放してっ！
放してっばあっ！！」

璃月への助けを
求めるために

皆が必死に時間を
稼いで私を逃がして
くれたのに…

まさか宝盗団に
待ち伏せされて
いたなんて…っ！！

「へへへ…
可愛いおっぱい
してるじゃねえか」

「早く放しなさいよ…
さもないと…」

「何強がりやがって
状況分かってんのか？」

「お前ら西風騎士団に
はいつも邪魔されて
たからなあ」

「いい機会だ」

「ひ…っ、ちよつと
何する気?」

「決まってるんだろ」

「今までの恨みを
その体にタップリと…」

「刻み込んで
やるんだおよツツ!!」

うそ…私の初めて…

鋭い痛みと喪失感…

「やって
やったぞ!!」

「やった…!!」

「あの西風騎士団の女を
俺たちが犯してる!」

「いたっ痛いっ!!
やめてえっ!」

「だれがやめるかよ!」

「オラッオラアツ!!」

「俺たちの
恨みをとくと
味わえっ!!」

「ああああっ!!」

「代理団長のジン
それに遊撃隊長の
エウルアだっけか!」

「ほんとなら
あいつらの方が
良かったんだが」

「ガキみてえな
体してるわりには」

「マンコの締め付けは
想像以上だぜ!」

「あつ!!
やめ...奥...痛っ」

「突かないでえっ!!」

「そろそろ出すぞっ!!」

「それってまさかっ!!」

「そのまさかだよ!!」

「ここまできて
出さねえわけ
ねえだろ!」

「二発で孕ませて
やるからよお!」

「やだ...やだやだやだっ!!」

「激しさを増す
子宮口への衝撃」

「おらっ...もつと
奥まで押し込んで...」
「あああああっ!!」

私の苦悦を聞きながら
男たちはさらに
興奮して私を
犯し続ける

「おおおっ
出る出る!!」

「出るッ!!」

出てる…腔内で…っ

「あッ! ああッ!!」

精液が私の子宮を
征服し始める

あっという間に
子宮を満たし

入りきらなかった
精液が腔から
溢れ出てくる…



こんな奴らに
穢された...

悔しさで悲しさか
私の心を支配していく

「へへ...たっぷり
出してやったぜ」

「...気は済んだでしょ...
早く開放してよ...」

やっと地獄が終わる...
助けを呼びに行ける...

「う...こんなに...」

「西風騎士団も
こうなったら
ただのマンコだな」

「はっはっはっは!!」

「あ? 何言ってるんだ、
まだ始まった
ばかりだろ?」

「え...?」

「じゃ、次俺の番な」

「ちょ、ちよつと
もう十分でしょ!」

「まだ続けるの!」

「1回で犯り捨てなんて
もったいないねえだろ」

「ここに居る全員の
恨みを受け取って
もらわねえとな」

私を孕ませるため
男の股間の凶器が
膨れ上がる

「あ...いや...」

もう...やめて...」

「いや...いやあ...」

狂気の宴は
始まうた
ばかりだった



業火に包まれる
モンド

女たちは
捕らえられ

西風騎士団員の
抵抗も虚しく

たわわに実った
雌の果実はヒルチャール
たちの暴食に
食い荒らされていた

一人——
また一人と——

暴食の罅は
その果実を
食い荒らし……

雌たちの淫らな
叫び声は
増え続け……

そして——



バオオ

心が耐え切れず
神の目を失った者

神の目を新たな
生命の器として
利用された者

そのどちらも
ヒルチャール達の
苗床となったのだった

オオ

多くの雌たちの悲鳴

——モンド陥落——

オオ

モンドに火の手が
上がってから
数時間…

「やっぱり
この岩場を通ると
思ってたぜ」

「まあヒルチヤール達の
包囲網を
抜けるにはここを
抜けるしか
ないからなあ」

「くう…っ」

「放してっ！
放してっばあっ！！」

璃月への助けを
求めるために

皆が必死に時間を
稼いで私を逃がして
くれたのに…

まさか宝盗団に
待ち伏せされて
いたなんて…っ！！

「へへへ…
可愛いおっぱい
してるじゃねえか」

「早く放しなさいよ…
さもないと…」

「何強がりやがって
状況分かってんのか？」

「お前ら西風騎士団に
はいつも邪魔されて
たからなあ」

「いい機会だ」

「ひ…っ、ちよっと
何する気!」

「決まってるんだろ」

「今までの恨みを
その体にタップリと…」

「刻み込んで
やるんだおよツツ!!」

うそ…私の初めて…

鋭い痛みと喪失感…

「やって
やったぞ!!」

「やった…!!」

「あの西風騎士団の女を
俺たちが犯してる!」

「いたっ痛いっ!!
やめてえっ!!」

「だれがやめるかよ!」

「オラッオラアツ!!」

「俺たちの
恨みをとくと
味わえっ!!」

「ああああっ!!」

「代理団長のジン
それに遊撃隊長の
エウルアだっけか!」

「ほんとなら
あいつらの方が
良かったんだが」

「ガキみてえな
体してるわりには」

「マンコの締め付けは
想像以上だぜ!」

「あっ!!
やめ...奥...痛っ」
「突かないでえっ!!」

「おらっ、もつと
奥まで押し込んで...」
「あああああっ!!」

私の苦悦を聞きながら
男たちはさらに
興奮して私を
犯し続ける

「そろそろ出すぞっ!!」

「それっでまさかっ!!」

「そのまさかだよ!!」

「ここまできて
出さねえわけ
ねえだろ!」

激しさを増す
子宮口への衝撃

こんな奴らに
孕まされたくないっ!!

「二発で孕ませて
やるからよお!」

やだ...やだやだやだっ!!

「おおおっ
出る出る!!」

「出るッ!!」

出てる…膣内で…っ

「あッ! ああッ!!」

精液が私の子宮を
征服し始める

あっという間に
子宮を満たし

入りきらなかった
精液が膣から
溢れ出てくる…



こんな奴らに
穢された...

悔しさと悲しさが
私の心を支配していく

「へへ...たっぷり
出してやったぜ」

「...気は済んだでしょ...
早く開放してよ...」

やっと地獄が終わる...
助けを呼びに行ける...

「う...こんなに...」

「西風騎士団も
こうなったら
ただのマンコだな」

「はっはっはっは!!」

「あ? 何言ってるんだ、
まだ始まった
ばかりだろ?」

「え...?」

「じゃ、次俺の番な」

「ちょ、ちよつと
もう十分でしょ!」

「まだ続けるの!」

「1回で犯り捨てなんて
もったいねえだろ」

「ここにいる全員の
恨みを受け取って
もらわねえとな」

私を孕ませるため
男の股間の凶器が
膨れ上がる

「あ...いや...
もう...やめて...」

「いや...いやあ...」

狂気の宴は
始まうた
ばかりだった

一度解き放たれた狂気は
複数の塊となって
私に襲い掛かっていった...

女の象徴である部分は
乱暴に扱われ

先ほどまで処女だった
未発達な私のアソコは

激しすぎる男達の
突き入れに
真っ赤に充血していた

「オラ孕めやッ!」

「こっちも
出すぞッ!」

「一滴残らず
飲み干せよな!」

苦い...苦しい
はずなのに...

痛みが次第に
消えていって
お腹の奥を
突かれるたびに

体を稲妻みたいなのが
突き抜けていってる

こんな無理矢理
犯されてるのに...
体が否応なく
反応してきて...

だめ...
きちやう...もう...
アソコの奥で何かが...

「あああ...やだ
やだやだあッ!!」



爆発しちゃう!!

「お、こいつ今
イッたぞ」

「偉そうなこと
言っても所詮は
女ってことだ
ははははっ!」

イク…
今のが…

心は否定したくても…
体が肯定して
しまってる…

「女」で
あることを…



「こいつ
まだそんなこと
言ってるのか?」

「モンドが
どうなったのか
知らねえのか?」

「いいか、よく聞け」



もう…捕まってから
丸2日経ってる…
皆は…モンドは…
西風騎士団の皆は…

「もう…いいでしょ…
許して…」

「モンドの皆を…
助けたいの…」



「もう陥落したとよ」

「西風騎士団も壊滅」

「陥…落…?」

「全員ビルチャール達に
輪姦されてるつでよ」

「ハハハッ」 そんな…

「放して!!
放してよおっ!!」

「ばーか、せっかく
捕まえた獲物を」

「ヒルチャールなんかの
苗床にするわけねえだろ!!」

「デメエは『生俺たちが
可愛がつてやるから』」

「——よっ!!」

子宮が
つぶされて……っ!!

「ガキ孕めば
仲間の事なんざ
どうでも
良くなるだろ」

「やめてっ!!」

「やだっ!!」

「やだああっ!!」

私のせいだ……

私が間に
合わなかったせいで……っ

モンドが……

「オラ出すぞ
孕めえっ!!」

「皆が……っ!!」

犯されるたびに
快楽が駆け巡り

そして容赦なく子宮に
流れ込んでくる子種



体はされるがままに
犯され続ける…

更なる追い打ちが
私に襲いかかり

望まぬ絶頂—

降りかかる子種

繰り返される
行為に私の心は—

砕けていった…

ごめん…

皆…

あ…

あ…

「そらっ
孕めっ!!」

「やつと大人しく
なったな」

「それとも、もう
壊れたのか?」

「違いねえ」

「ははははははっ!!」

「視界を染めて
いく子種」

「薄れゆく意識」

「二時的なもんだろ」

「これから毎日輪姦して
ガキ作ってもらわねえとな」

「モンドで
ヒルチャールのがキ
孕まされるより
全然マシだろ」

「西風が吹きすさぶ
ことはもう
訪れない」